

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	岡崎 渉
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>日本語の雑談における母語話者と上級学習者によるスタイルシフトの研究 —非デスマス形の指標的機能の観点から—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 畑佐 由紀子</p> <p>審査委員 教授 白川 博之</p> <p>審査委員 教授 柳澤 浩哉</p> <p>審査委員 教授 深澤 清治</p> <p>審査委員 准教授 永田 良太</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究では、日本語母語話者及び日本語学習者を対象に、主にデスマス形が用いられる会話における、非デスマス形へのシフトを調査した。会話においてデスマス形・非デスマス形というスタイルは、どちらか一方のみが用いられるわけではなく、しばしば異なるスタイルへのシフトが起こる。先行研究において非デスマス形へのシフトは主に、親しみの表示や心理的距離の短縮を行うとされている。しかし、「指標性」の観点を用いた研究においてスタイルは、そのような待遇表現としての機能と一対一で結びつくものではなく、発話時に共起する要素や文脈との協働により、話し手の行為やアイデンティティ、聞き手との社会的関係、談話展開等に関するさまざまな意味の指標として機能するものであることが示されている。デスマス形のような明確なマーカーをもたないこともあり、従来なおざりにされてきた非デスマス形というスタイルについて検討を行い、その上で母語話者及び学習者のスタイル運用の実態を調査するために、以下の研究課題を設けた。</p> <p>(1) 非デスマス形はどのように分類可能か。</p> <p>(2) デスマス形主体の雑談において、母語話者によってシフトされる非デスマス形はどのような機能を果たしているか。</p> <p>(3) デスマス形主体の雑談において、日本在住の上級学習者によってシフトされる非デスマス形はどのような特徴をもつか。</p> <p>第1章では、スタイルに関する先行研究における問題の所在と本研究の目的を述べた。第2章では、母語話者及び学習者による、シフトを含めたスタイル運用に関して、先行研究から得られた知見を整理した後、母語話者と学習者、それぞれにおいて残された問題を挙げ、本研究の研究課題を導出した。第3章では、母語話者同士によるデスマス形主体の会話及び非デスマス形主体の会話を元に、非デスマス形に混在する異なるタイプの分類方法を検討した。第4章では、母語話者同士によるデスマス形主体の会話を元に、シフトされる非デスマス形について検討した。第5章では、母語話者と学習者によるデスマス形主</p>			

体の会話を元に、第4章で得られた母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者によるシフトされた非デスマス形について検討した。第6章では、母語話者及び学習者による非デスマス形使用の特徴をまとめ、総合的な考察を行った。第7章では、本研究で得られた知見を述べ、日本語教育のスタイル指導に対する提言及び今後の課題を述べた。

本研究から得られた知見は、主に以下の三点である。

- ① 非デスマス形は、従来指摘されていたインフォーマルスタイル (IF)、インパーソナルスタイル (IP) だけでなく、独話的発話も混在しており、この三種に区別できる。
- ② デスマス形主体の会話において母語話者は IF をほとんど用いておらず、先行研究で示されてきた非デスマス形へのシフトが起こりやすい発話環境は、IP または独話的発話の用いられやすい発話環境であることが示された。また、IP・独話的発話に共通する機能として、次のターンを極力制約せず話題の機会を提供することで、談話を非主導的に進める手段として利用されていることがわかった。
- ③ 学習者には、母語話者が通常使用を控えている IF の使用が散見されること、IP・独話的発話の機能をほとんど活用していないことがわかった。また、学習者の非デスマス形は、多くの場合裸の形式が用いられていたことから、学習者は日本在住の上級話者であっても、多くの者は非デスマス形へのシフトを主体的に行っているわけではないことが示された。

本研究は、以下の点で研究意義が認められる。

- ① 「非丁寧」を表す待遇表現として扱われることの多かった非デスマス形について、従来指摘されていた IF, IP だけでなく、独話的発話の存在も指摘した上で、これらの分類基準を示した。
- ② また、IF, IP, 独話的発話が日本語の雑談において、どのような機能を果たしているのかを示した。
- ③ 非デスマス形の分類を踏まえることで、母語話者及び学習者による非デスマス形へのスタイルシフトの、より正確な運用実態を示すことができた。この点は、人々がやりとりにおいてスタイルを操作することで何を行っているのかを追求する上で、今後のスタイル研究や談話研究、或いは日本語学や相互行為研究にも貢献できる知見である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 28 年 5 月 26 日